

FAQ

Q1. 構造化で書くと設計書のボリュームが増えるのでは？



確かに、2～3割ほどは増えるかもしれません。

しかし、今の設計書と比較はできません。

何故なら、増える内容の多くは、今の設計書に漏れた条件や曖昧な表現を正確に表現しなおした結果だからです。

設計書ボリュームの増加による生産性の減少より、構造化により手戻りが減る生産性の向上効果のほうがはるかに大きいと考えます

Q2. 自動作成のテストケースが膨大になるのでは？



お気づきと思いますが、テストケースの元はパスです。

構文通りにパスを抽出するとかなりの数になります。

しかし、弊社にはパスの自動抽出技術で培ったノウハウがあり、以下により現実的な数でテストがおこなえます。

- ・実行されることのないパスをシステムが自動削除
- ・パスを減らすコーディング方法を指導
- ・パスの絞込み条件登録

Q3. 設計書を構造化で書くのは難しいのでは？



そんなことはありません。

構造化プログラミングやフローチャートを作成したことのある人ならすぐに作成できます。

構文は、構造化用の構文として条件文(if文)、選択文(switch文)、ジャンプ文(goto文)、等おなじみの構文が8種類、その他に設計情報を共有するための構文が7種類です。

書き方の手順としては、if命令を例にとると、if命令は「もし、～ならば」という意味ですが、構造化設計書を作成する際は「if」という語句に代わるキーワードを登録しておかなくてはなりません。

キーワードはどんな語句でも構いません。例えば「のとき」です。

気を付けなければならないのは、「のとき」という語句が設計書で使われている箇所は全てif命令とシステムは認識しますから、キーワード登録した語句は設計書の中ではユニークでなければなりません。

「設計支援システム」には一通りのキーワードが登録しており、練習用の設計書を作成することですぐに慣れていただけるようになっています。